広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第50号　2001　447－453

小学5年生と中学2年生の自己実現の発達

－どのような側面が発達するか－

山　崎　　晃

(2001年9月28日受理)

A developmental study of self-actualization of fifth graders in elementary school and second graders in junior high school

Akira Yamazaki

Based on Abraham Maslow's level of self-actualization and Buckmaster's Reflections of Self and Environment (ROSE), Schantz & Buckmaster (1984) developed instrument (Reflections of Self by Youth:ROSY) to measure self-actualizing growth in preadolescents. In the present research, it is conducted to ROSY for use with 5th grade in elementary school and 2nd. grade student in junior high school. One hundred and thirty five students, 75 second graders and 78 2nd graders, were investigated through the questionnaire (ROSY). The moderate alpha coefficients were calculated for Factor 1 and Factor 2,(respectively, α = .45, .82) and suggests moderate reliable measure of the ROSY. Mean scores were analyzed by ANOVA(grad : 5th vs. 2nd × gender : male vs. female). As a result, the difference by the grade or gender, and interaction of grade and gender were obtained in some items. Especially, a significant age difference and interaction were found in the item that "I wish I were perfect" and "People can depend on me", and a significant gender difference and interaction were found in the item that "I like to be the center of attention.". Interaction effect was obtained in the Factor 1(ROSY). These results suggest that ROSY is useful for Japanese students(5th elementary school children and 2nd junior high school children).

Key words: development, self-actualization, school children, measurement, ROSY
キーワード：自己実現の発達，性差，小学生，中学生

今日，社会情勢の急激な変化に伴いすべての年齢の人々に，著しい環境の変化がみられ，そのことがもとで多くの心理的ストレスがかかってきており，人間性の喪失が生じがちである。そのような中にあって，自分らしい自分の生き方の基本の一つに自己実現がある。この自己実現については，古くはゴルトシュタインによる主張があり，その後マズローの人間性心理学の理論，ロージャース，ホーナイなどの主として臨床的な立場からの研究も多く行われてきた。本研究は，従来あまり省みられることのなかった幼児期から思春期，さらには研究の発展から老年期までの生涯にわたる自己実現についての一連の研究をなすものの一つである。自己実現を達成することは，あらゆる年齢の人々にとって重要である。生涯発達の観点から考えると幼児期には幼児期にふさわしい自己実現があり，青年期には青年期にふさわしい自己実現があり，高齢者には高齢者にふさわしい自己実現があるはずである。本研究は，このような視点に立って研究を進めたものである。

日本においては，自己実現に関する研究はそれ程活発に行われているとはいえないが，個人一人ひとりの自己実現の充実を図るためには，その基礎となる研究が必要であることは，誰しも疑いのないところであろう。

ところで，人間はさまざまな欲求を持ちながら生きているが，この点についてMaslow (1971) は人間の多様な欲求を階層構造として捉えた。まず生きていく上で基礎となる最も低次な欲求として，生理的欲求があり，ついで同じく生命の維持に重要な安全欲求が位

置し，その上に所属と愛情の欲求，承認と自尊の欲求を基本的欲求として位置づけた。さらに，これらの基本的欲求を満たした時に表われる，より高次の欲求として自己実現の欲求を配置した。Maslow (1971) はこの健康的な人間の持つ自己実現欲求を成長欲求と呼んだ。人間は自ら自分たちの到達できる最高の状態へ向かおうとする成長する生き物であると捉えられ，全体論的人間観に立って，内面的，人格的な視点で成長をみようとするものである。

自己実現は，何らかの価値的に有意味な環境に触れながら，自発的な遊びや学びを通じて自己の固有特性を発揮しようとする姿（山崎・白石，1993a,b；山崎・上原・柏本・米神・井田・菅田，1993；山崎・白石，1994）や，自己の内的欲求から生まれ，自らの意志に基づいて選択，決定した行為によって，自分自身の内なる思いや願いを実現しようとする姿（深田・山崎・井上・原・米神・井田・湯地・細田・柏本，1996；米神・井田・湯地・細田・柏本・山崎・井上・深田・原，1996）としてとらえることができる。

自己実現について山崎を中心とした研究が行われている（山崎，1999，2000；山崎・湯澤・石王，2001など）。そこには，幼児の自己実現と社会的情報処理との関連，幼児の自己実現と社会的行動との関連，自己実現傾向の変動と幼児の行動特徴との関係，幼児期と児童期の自己実現を自己制御機能からとらえようとする研究，親の自己実現及び養育態度との関連から中学生の自己実現を考えようとする研究，大学生の自己実現と親子関係の認知との関連に関する研究，高齢者の自己実現と個人体験との関連に関する研究，児童期の自己実現と親の発達期待に対する認知との関連に関する研究などがある。

幼稚園や小学校は，他人との集団生活の場であるので，必然的にそこでは，自分とは異なる対等な仲間が多数存在しており，しかも自分を中心としていた家庭での世界とは異った関係の築くことが特に重要な問題となってくる。自己実現の達成と対等な仲間関係との生活場面での人間関係の構築の間の関連をとらえることは，必要なことではある。

ところで，近年，さまざまな年齢層で，暴力をはじめとする様々な問題が表面化している。このような状況の中で，自己実現の獲得について，あるいは達成についてその発達的変化を検討することは，適切な援助や対処をするために極めて大切なことであると思われる。実際に小学生から中学生にかけてどのような側面が発達するのかを明らかにすることは，発達的変化の著しい時期の児童・生徒の指導に役立つはずである。これまでにも中学生の内面にどういった変化が生じているのかをとらえ，その内面に関する研究も活発に行われており，今の時代は中学生が自己を肯定し，自己実現を達成したり，獲得したりすることが難しいとする指摘もある（佐藤・森，1998; 吉田，1998など）。しかし，自己実現の達成・獲得に関わる問題は，どの時代にも存在していたのであり（福井，1980），今の時代に特有の現象ではないが，自己実現の達成を阻む要因は時代の移り変わりとともに推移するものと，時代を超えた普遍的なものがあるはずである。自己実現の発達を含めて，発達に関わる要因は多様化し，複雑化しているといえる。このような時代に，小学校から中学校にかけての時期の自己実現に関する発達的なとらえをしてその実態を明らかにすることは，意味のあることであろう。

中学生を対象とした自己の確立と親の養育態度などの役割との関連についての研究では，親の重要性が強調されている（山添，1997など）。自己概念が形成される際の手がかりとして，①事物，②自分自身，③他者，④集団の４つがある（高田，1992）ことや，自分にとって重要な他者が両親から友人へと青年期に変化する（高田，1997）ことなどが挙げられる。中学生の特徴として特に自己概念を中心として，自己と他者の関係に目を向け始める時期としてとらえることが出来る。

先述したように，自己実現については，従来，主として青年期以後を対象とした研究が多く行われてきた。しかし，生涯を通して自己実現は達成されれるべきものであり，それぞれの時期・年齢にふさわしい自己実現の姿が求められるべきである。

我々は自己実現の獲得に関する総合的な研究を行った（山崎・湯澤・石王；2001）。その結果，それぞれの年齢段階にそれぞれの自己実現があり，しかもそれは様々な側面と密接な関係があることが示された。しかし，自己実現の測定については，Maslow (1971) の主張する自己実現の15の側面について評定した結果を基礎とするものがほとんどであった。しかし，自己実現は極めて広い概念であり，さまざまなとらえ方が可能である。例えば，大学生を中心として村山らはMaslowとは別の研究を行っている。さらに近年，いくつかの測定尺度が開発されているが，その一つにSchatz & Buckmaster (1984) の尺度がある。彼らは，Reflection of Self by Youth (ROSY) の全項目を因子分析し，２因子 (Feelings:evaluation of selfとPerceptions of self) を見いだしている。しかし，現在までのところ，本邦においてはこの尺度を使った研究は，著者の知る限りでは見あたらない。

このような状況から，ROSYが果たして，日本で利

用可能なものであるか否かを検討するとが多面的な自己実現をとらえるためには必要である。生涯発達のそれぞれの時期の自己実現がどのようなものであるかについて，従来とは別の尺度で測定することも必要である。さらに，各時期の発達的変化を横断的にとらえることの試みはほとんどなされていないので，児童期から青年期初期の変化をとらえることも重要である。

本研究の目的は，第１に本邦においてもこの尺度が利用可能か否か，第２にこの２因子を構成する項目について，小学生と中学生を対象として，その発達的変化を検討することである。すなわち，ROSY尺度の利用可能性を検討し，小学５年生と中学２年生の自己実現の測定し，自己実現のどのような側面が発達するかを明らかにすることである。

方　法

被験者

広島県Ｍ市内の小学校５年生（男子37名，女子38名）75名と中学校２年生（男子42名，女子36名）78名，計153名であった。

本研究でこの２つの学年を対象として選択した理由は，以下のような理由による。まず，５年生についてはこの学年になると自己評定がかなり正確にできるようになるということ，先行研究においての対象年齢（自己評定による）が４年生であったこと，さらに小学校の教師の話から，この学年は安定した時期の学年であるということに基づいて選択した。中学校２年については，中学校生活にも慣れてきており，安定した生活を送っていること，自我の芽生えも次第に顕著になりつつあること，高校進学のための準備は差し迫って緊急の課題ではないことなどであった。

測定尺度

自己実現測定尺度　Schatz & Buckmaster (1984) が作成したReflection of Self by Youth (ROSY) を用いた。この自己実現測定尺度は，成人を対象として作成されたReflection of Self and Environment (ROSE)を基に，児童・生徒に適用するために開発されたものである。この尺度は62項目から構成されているが，実際に有効な項目として52項目が抽出されている。本研究においてもこの52項目を用いた。原文を日本語に翻訳し，項目の表現を小学生にも理解できるようにやさしくした。

手続き

自己実現尺度について，５段階評定尺度を作成し，まったくあてはまらない(1点)から，まったく当てはまる（5点）までの該当する箇所に，チェックマークを記入するように教示した。調査は，担任教師が授業の空き時間に教室内で用紙を個別に配布した。各被験者は自己のペースで記入し，その後，担任教師によって回収された。

結果と考察

ROSY尺度の検討

自己実現尺度については，52項目について，全く当てはまらないに1点，全く当てはまるに5点を与え，それぞれの項目の得点とした。本研究においては，得られたデータについて改めて因子分析をするという手続きはとらず，Schatz & Buckmaster (1984) の因子分析結果に基づいて，第１因子Feelings : evaluation of selfと第２因子erceptions of selfに分けて，それぞれについて分析することとした。

まず，各因子を構成する項目の信頼係数を求めた。クロンバックのα係数を算出した結果，第１因子については$\alpha=.75$，第２因子は$\alpha=.82$であり，両方の項目も因子を構成する項目として信頼できるものであり，内的整合性をもっているので，この測定尺度が信頼できるものであると言える。そこから本研究では，この尺度が信頼性のあるものであり，これを用いてさらに分析が可能であると判断した。

つぎに，ROSYの因子別に平均値（Table 1）について，学年（小学５年生・中学２年生）×性別（男・女）の２要因分散分析を行った結果，第１因子については主効果，交互作用ともに有意ではなかった。第２因子については主効果は有意ではなかったが，交互作用が有意であった（$F(1,1)=4.09$, $p<0.05$)。そこで，下位検定を行った結果，小５では性差はみられなかったが，中２では男子が女子よりも平均値が高くなった。この

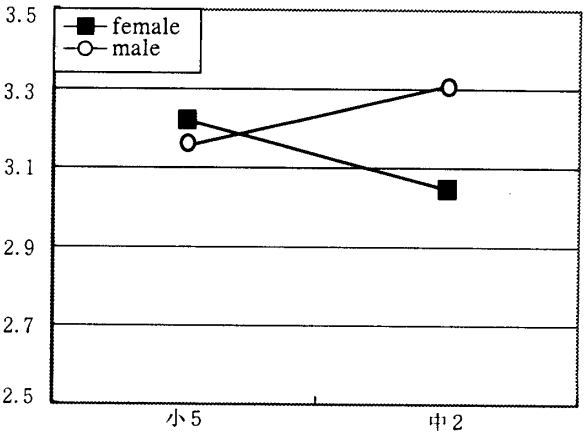

Figure 1 ROSY第２因子の因子分析（学年×性別）

Table 1　ROSY の学年と男女別の項目ごとの平均及び標準偏差

	第１因子(Feelings:evaluation of self)						第２因子(Perceptions of self)				
item	小５女	小５男	中２女	中２男	全群	item	小５女	小５男	中２女	中２男	全群
F101	2.4	2.4	2.2	3.0	2.5	F201	3.9	3.7	3.6	3.7	3.7
	1.2	1.5	1.1	1.3	1.3		1.2	1.2	1.0	1.3	1.2
F102	3.3	2.7	3.1	3.0	3.0	F202	3.1	3.0	3.2	3.5	3.2
	1.3	1.3	1.3	1.2	1.3		1.2	1.4	1.1	1.3	1.3
F103	2.6	2.5	2.5	3.1	2.6	F203	3.3	3.1	2.8	3.1	3.1
	1.4	1.4	1.1	1.2	1.3		1.1	1.1	1.2	1.4	1.2
F104	4.3	3.6	4.4	3.8	4.0	F204	3.9	3.9	3.8	3.8	3.8
	1.2	1.4	0.9	1.0	1.2		1	1	1.2	1	1.1
F105	3.2	3.3	3.0	3.4	3.2	F205	3.7	3.5	4	3.9	3.7
	1.3	1.5	1.3	1.2	1.3		1.3	1.3	1	0.9	1.1
F106	2.7	3.5	4.0	3.4	3.4	F206	3.6	3.6	3.2	3.5	3.5
	1.5	1.5	1.3	1.5	1.5		1.2	1.2	1.3	1.1	1.2
F107	3.4	3.5	3.4	3.4	3.4	F207	3.1	3.1	2.9	3	3
	1.4	1.3	1.0	1.2	1.2		1.2	1.1	1.2	1.3	1.2
F108	3.0	2.3	3.3	3.0	2.9	F208	3.3	3.4	2.4	2.7	3
	1.3	1.5	1.0	1.2	1.3		1	1.1	1	0.9	1.1
F109	4.0	3.6	4.1	4.1	4.0	F209	4	3.2	3.9	3.6	3.6
	1.1	1.5	1.0	0.9	1.1		0.9	1.4	1	1.2	1.2
F110	3.5	3.6	3.2	3.7	3.5	F210	2.8	3.1	2.9	3.3	3
	1.2	1.4	1.3	1.1	1.2		1.3	1.3	1.3	1.3	1.3
F111	3.9	4.1	3.7	4.1	3.9	F211	3.4	3.3	3.5	3.7	3.5
	1.0	1.2	1.3	1.1	1.1		1.3	1	1.1	0.9	1.1
F112	3.5	3.5	3.0	2.6	3.1	F212	3.2	3.1	2.6	3.1	3
	1.3	1.2	1.2	1.2	1.3		0.7	0.9	0.8	0.8	0.9
F113	3.0	3.1	2.8	3.0	3.0	F213	3.4	3.1	3	3.2	3.2
	1.2	1.4	1.2	1.0	1.2		1.1	1.2	0.8	0.9	1
F114	3.5	3.4	3.6	3.7	3.5	F214	2.6	2.3	1.9	2.4	2.3
	1.4	1.5	1.3	1.2	1.4		1.2	1.2	1.1	1.3	1.2
F115	2.5	2.4	3.1	3.0	2.8	F215	2.4	2.7	2.2	3.2	2.7
	1.2	1.2	1.3	1.1	1.2		1.3	1.4	1.2	1.3	1.4
F116	3.5	3.0	2.8	3.3	3.2	F216	2.9	3.1	2.5	2.6	2.8
	1.4	1.5	1.3	1.3	1.3		1.2	1.5	1.5	1.2	1.3
F117	2.7	2.7	3.0	2.8	2.8	F217	3.1	3	2.3	2.4	2.7
	1.1	1.3	1.3	1.1	1.2		1	1.1	0.9	0.9	1.1
F118	2.8	2.7	2.9	2.6	2.8	F218	3.5	3.2	3.1	4	3.4
	1.2	1.2	1.2	1.1	1.2		1.4	1.4	1.4	1.1	1.4
F119	2.5	2.4	2.5	1.9	2.3	F219	2.8	2.7	2.9	2.7	2.8
	1.4	1.2	1.3	0.9	1.2		1.2	1.3	1.2	1.2	1.2
F120	3.4	2.6	3.0	3.6	3.2	F220	3.7	3.6	3.8	3.9	3.7
	1.2	1.3	1.3	1.2	1.3		1.4	1.6	1.1	1	1.3
F121	3.2	2.8	3.6	3.6	3.3	F221	3.6	3.2	3.4	3.4	3.4
	1.2	1.3	1.1	1.2	1.3		1	1.2	1.2	1.1	1.1
F122	2.9	2.6	2.8	2.8	2.8	F222	3.1	3.3	2.9	3.4	3.2
	1.2	1.2	1.3	1.2	1.2		1.1	1.4	1.2	1.2	1.2
F123	3.2	3.1	3.2	3.2	3.2	F223	2.6	2.9	3	3.1	2.9
	1.3	1.4	1.1	1.1	1.2		1.3	1.5	1.4	1.4	1.4
						F224	3	2.9	2.7	3	2.9
							1.2	1.1	1.2	1.1	1.2
						F225	2.6	2.3	2.3	2.7	2.5
							1.1	1	1.1	0.9	1
						F226	3.4	3.1	3	3.5	3.2
							1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
						F227	3.1	3.1	3.9	3.7	3.4
							1.4	1.3	1.1	1.1	1.3
						F228	3.6	3.5	3.9	4	3.7
							1.1	1.3	1.2	0.9	1.1
						F229	2.6	2.7	2.7	3.2	2.8
各段の上段が平均値、下段が標準偏差							1.4	1.4	1.4	1.1	1.3

ことは，第２因子のPerceptions of selfという，いわゆる自己認知については男子の評定点が高くなったことを示している(Figure 1)。

このような結果は，ROSYを構成する項目が無条件に日本で利用できるとは言えないことを示している。特に，第１因子については，全体としては十分な発達的変化をとらえているとは言えなかった。また，第２因子についても，男女を込みにした分析では発達的差異は見いだせなかった。したがって，今後さらに，Falk, Bard, Duffy, Grieco, & Markus (1988) がMaslowian Scale作成の際に行った，尺度を構成する項目や因子構造などの信頼性，内容に関する妥当性，構成的妥当性，基準関連妥当性など，さまざまな妥当性をも検討した上で，項目を精選するなどの手続きを通して，さらに熟考した上で実施することが望ましい。

ROSYの項目ごとの学年と男女別平均値

小学５年生と中学２年生との間に，自己実現の高さにで違いがあるか否かについて検討するために，因子別に平均値を求めた。第１因子については，小５＝3.14，中２＝3.21，第２因子については，小５＝3.16，中２＝3.14であり，年齢による違いはみられなかった。

しかし，自己実現に関しては発達的変化は全くみられないとは考えにくい。そこで，項目内容を検討した結果，いくつかの項目については年齢による違いがみられると予想される項目（例えば，完ぺきな人間でありたい，誰とでも公平に接することができる，優秀な成績を上げるなど成績に関連する項目，など）があることが見出された。例えば，中学生になると自我の発達が始まり，自己と他者の区別や違いに目を向けるようになることから，さらに年齢による発達的変化も予想される。そうであるとすれば，多くの項目から構成されるROSYにおいては，個別の項目ごとにみていくことも必要である。さらに，自我の発達とそれに関わる男女の発達差を考慮すれば，必然的に性別に関する要因も含めて分析する必要がある。そこで本研究においては，ROSYの第１因子と第２因子を構成するそれぞれの項目の評定値について，学年(2)と男女(2)の要因を考慮しながら比較することとした。

因子を構成するそれぞれの項目について，学年（小学５年生・中学２年生）×性別（男・女）の２要因分散分析を行った。学年の主効果がみられた項目は，F106「完ぺきな人間だったらなと思う」（$F(1,1)=9.25$，$p=0.003$，小５＜中２），F108「すぐやきもちをやいてしまう」（$F(1,1)=5.25$，$p<0.05$，小５＜中２），F109「他の人に自分を印象づけることは重要で

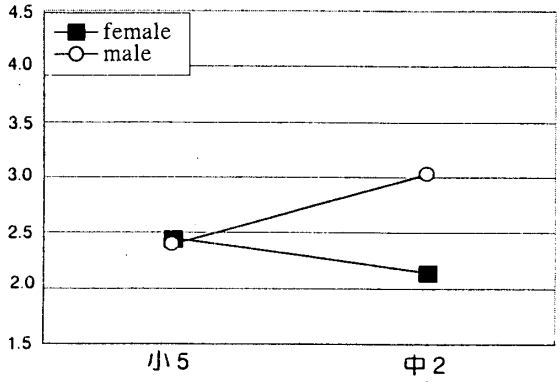

Figure 2　大いに人の注目を集めたい：F101

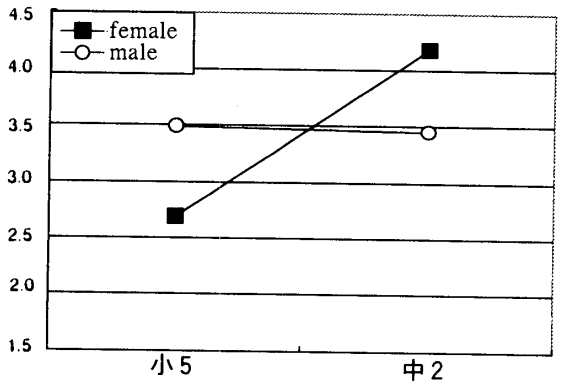

Figure 3　完璧な人間だったらと思う：F106

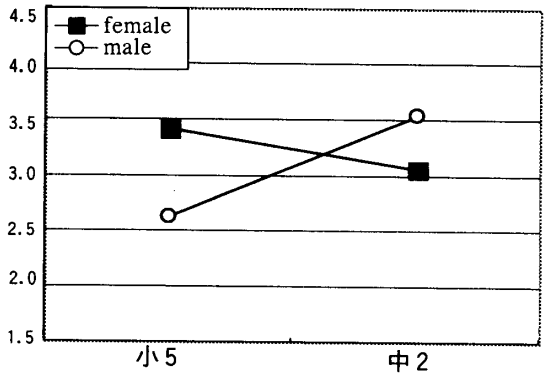

Figure 4　何にでもなれそうだし，できそうな気分になる：F120

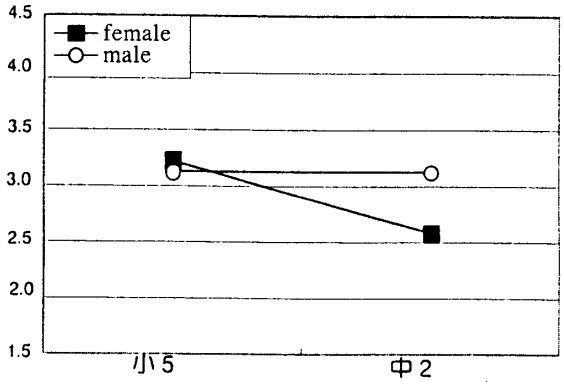

Figure 5　信頼に応えることができる：F212

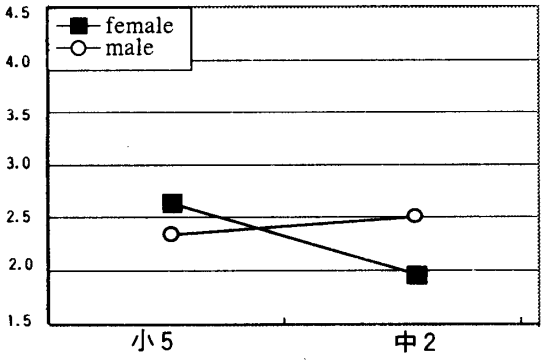

Figure 6　いろいろな手がかりをうまくまとめることができる：F216

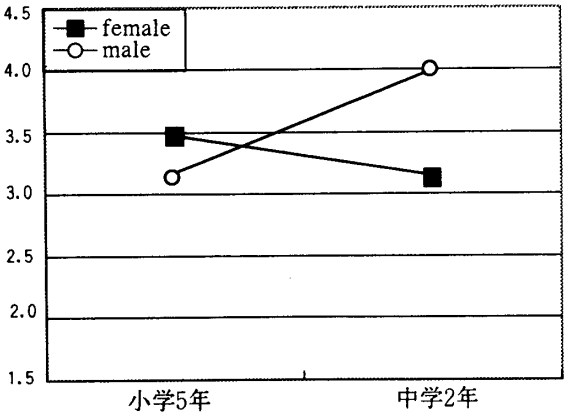

Figure 7　没頭してしまう興味深いことがある：F218

ある」(F(1,1)＝3.70, p＜0.06, 小5＜中2), F112「優秀な成績をあげたり, 賞をもらうことはとても重要なことだ」(F(1,1)＝11.07, p＜0.001, 小5＞中2), F115「何かうまくいかない時, 気に入らない人をついつい責めてしまう」(F(1,1)＝8.28, p＜0.004, 小5＜中2), F121「自分の気持ちを人に伝えるのは苦手だ」(F(1,1)＝9.97, p＜0.002, 小5＜中2), F212「人の信頼に応えることができる」F(1,1)＝5.44, p＜0.02, 小5＞中2), F216「百科事典を読んだり調べたりすることがよくある」F(1,1)＝4.24, p＜0.04, 小5＜中2), F217「人を頼りにしない」(F(1,1)＝16.45, p＜0.001, 小5＞中2), F227「おかしいときには, 他に誰も笑わなくても, 笑う」(F(1,1)＝13.51, p＜0.001, 小5＜中2), F228「食が進む」(F(1,1)＝2.78, p＜0.097, 小5＜中2), F229「たとえ格好が悪くても, 気に入った服を着る」F(1,1)＝2.96, p＜0.087, 小5＜中2)。このように多くの項目において学年差がみられ, しかもその多くは中学生の方が小学生に比べて高いものであった（下線の項を除いて)。このように中学2年生は, 自らを振り返ることや他者との関係への敏感性が高くなったり, 自律的な行動が多くなるなどの行動がみられるようになってきた。

つぎに, 性差がみられた項目は以下の通りであった。

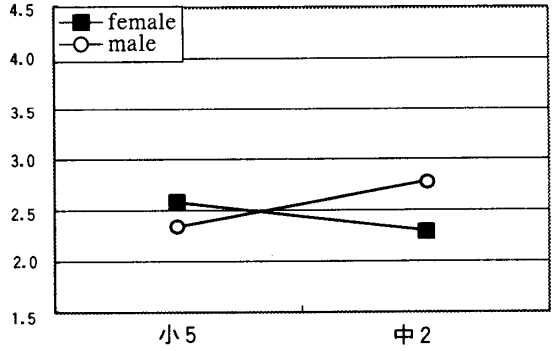

Figure 8　学校に不都合なことがあればそれを変える手助けができる：F225

F101「おおいに人の注目を集めたい」(F(1,1)＝3.89, p＜0.05, 男子＞女子), F104「他人からどう思われているのかが気になる」(F(1,1)＝10.70, p＜0.001, 男子＜女子), F108「すぐやきもちをやいてしまう」(F(1,1)＝5.30, p＜0.05, 男子＜女子), F111「もし, 報酬があると分かったらいっそう頑張る」(F(1,1)＝3.48, p＜0.064, 男子＞女子), F209「何かを学びとれる人のいうことは, 聞きたいと思う」(F(1,1)＝7.73, p＜0.01, 男子＜女子), F215「古いタイヤの利用法について, いくつものアイデアが浮かぶ」(F(1,1)＝7.95, p＜0.005, 男子＞女子)。このように第1因子を構成する項目に性差が多くみられた。ここで示されているように, 女子が男子に比べて, 他者からどのようにみられているかや他者に対する関心の高まりなどがみられるようになってきており, 女子の発達が早いことを裏付けているように思われる。

さらに, 学年×性別の交互作用がみられたのは以下の項目であった。F101「おおいに人の注目を集めたい」(F(1,1)＝4.84, p＜0.03) について下位分析の結果, 中学2年生の男女間で有意差がみられた（男子＞女子；Figure 2)。F106「完ぺきな人間だったらなと思う」(F(1,1)＝10.11, p＜0.002) について下位分析の結果, 女子の間で学年差がみられた（小5＜中2；Figure 3), F120「いろいろなことを考えるとワクワクして何にでもなれそうだし, なんでもできそうな気分になる」(F(1,1)＝9.41, p＜0.003) について下位分析の結果, 男子の間で学年差がみられた（小5＜中2；Figure 4)。F212「人の信頼にこたえることができる」(F(1,1)＝5.61, p＜0.02) について下位分析の結果(Figure 5), 男子では学年差はみられなかったが, 女子で学年差がみられた（小5＞中2)。F214「いろいろな手掛かりをうまくまとめることができるので, 優れた刑事になれそうだ」(F(1,1)＝4.25, p＜0.04) について下位分析の結果, 性差はみられなかったが全体的には, 男子は年齢による違いはほとん

どみられないが，女子では中２の値が低い傾向がみられた(Figure 6)。F218「ついつい長い時間没頭してしまうくらい，とても興味深いことがある」（$F(1,1)=6.98$，$p<0.01$）について下位分析の結果，小５では性差はみられないが，中２では性差がみられた（男子＞女子)(Figure 7)。F225「学校に不都合なことがあれば，それを変えるための手助けができる」（$F(1,1)=4.57$，$p<0.03$）について下位分析の結果，有意差はみられなかったが，小５では男子よりも女子の値が高く，中２では女子よりも男子の値が高い傾向を示した(Figure 8)。

このような結果から，小学校５年生と中学校２年生との間には，発達のさまざまな側面について違いがみられること，さらに，その違いは男女によって異なることなどが示された。したがって，一概に，自己実現に関してこの側面が発達する，あるいは男女間にはこのような違いがあるということはできないようである。

引用文献

Falk, C., Bard, D., Duffy, L., Grieco, K,. & Markus, E. 1988 Maslowian Scale. (ERIC Document Production Service ED 320 918)

深田昭三，山崎晃，井上勝，原孝成，米神博子，井田晴彦，湯地由美，細田和雅，柏本和子　1996　幼児の自己実現を日常のエピソードからとらえる (2)　幼年教育研究年報，17，49-60.

福井康之　1980　青年期の不安と成長：自己実現への道　有斐閣

米神博子，井田晴彦，湯地由美，細田和雅，柏本和子，山崎晃，井上勝，深田昭三，原孝成　1996　幼児の自己実現を日常のエピソードからとらえる (1)　広島大学教育学部・学部附属共同研究体制研究紀要，23, 7-16.

マズロー, A.H.　1971　人間性の心理学　産業能率短期大学出版部　(Motivation and personality, A.H. Maslow, 1954 Harper & Row)

佐藤学・森薫　1998　窒息状況の学校も子どもも救える　論座, 37, 12-23.

Schantz E.M., & Buckmaster,L.R.　1984 Development of instrument to measure self-actualizing growth in preadolescents. Journal of Creative Behavior, 18, 263-272.

高田利武　1992　他者と比べる自分 サイエンス社

高田利武　1997　自己概念の特質と形成　加藤隆勝・高木秀明(編)　青年心理学概論　誠信書房　Pp.33-49.

Weiser, N. L., & Meyers L.S. 1993 Validity and reliability of the revised California Psychological Inventory's Vector 3 Scale. Educational and psychological Measurement, 53. 1045-1054.

山崎晃　1999　自己実現獲得に関する発達的研究（Ⅰ）－大学生の自己実現測定尺度と親子関係認知との関連から－　広島大学教育学部紀要　第１部　48,183-191.

山崎晃　2000　自己実現の程度と精神的健康との関連　広島大学教育学部紀要　第３部（教育人間関連領域）, 4, 329-338.

山崎晃・白石敏行　1993a　幼児の自己調整の発達と保育者の援助・指導(２)　幼年教育研究年報　15, 1-11.

山崎晃・白石敏行　1993b　幼児の自己実現を自己主張と自己抑制からとらえる　保育学研究　31, 104-112.

山崎晃，上原貞夫，柏本和子，米神博子，井田晴彦，菅田直江　1993　幼児の自己実現・自己主張・自己抑制（１）　広島大学教育学部学部・附属共同研究体制紀要，21，11-20.

山崎晃・白石敏行 1994　幼児の自己実現・自己主張・自己抑制（Ⅱ）　広島大学教育学部学部・附属共同研究体制紀要，22，11-20.

山崎晃・湯澤正通・石王敦子 2001　幼児期から思春期までの自己実現獲得に関する教育心理学的実践研究　科学研究補助金　基盤研究(C)(代表者：山崎晃）報告書　課題番号：10610121

山添正　1997　「父性」のたてなおし「母性」のみなおし：子どもの自我発達への援助　ブレーン出版

吉田千秋　1998「新しい荒れ」と大人社会の歪み日本子どもを守る会(編)　子ども白書:「揺れる社会」と「子どもの事件」からの問いかけ　草土文化　Pp.22-27.